

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

増田 四郎

こゝに「經濟環境」という特殊な表現をもちいたわけは、本稿がフランク王國そのものの經濟發展なり經濟機構なりを、それ自體として取扱うのではなしに、當時のいわば國際的な經濟關連の中で、特にカロリング王朝期のこの國が、如何に重大な體制の變貌を餘儀なくされたかを見定めようとの意圖に發するものだからである。

周知のごとく、メロヴィング王朝とカロリング王朝をふくむフランク王國時代の流通經濟面をどのような情況のものとして把握するかについては、中世經濟史の専門家のあいだに實に多くの議論があり、とりわけアルフォンス・ドーブシュとアンリ・ピレンヌという今世紀前半の二大碩學の主張のあいだには、まったく相容れぬ對照

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

的な見解が行われている。⁽¹⁾ 即ちごく大ききばにいて、前者がメロヴィング王朝期よりカロリング王朝期にかけての連續的な經濟發展の諸相を詳述するのに反し、後者はメロヴィング王朝末までの「ローマニア」的性格の存續、八世紀前半における回教徒の西進、それを決定的契機とする地中海的統一の破壊、ローマ以來の廣範な國際貿易網の斷絶、その結果としてのカロリング王朝時代ガリアの急速な經濟的衰退を説き、兩王朝のあいだにあきらかな「經濟的對照」(un contraste économique) が存在した旨をくりかえし強調するのである。そしてこの構想がまた、ピレンヌの十一世紀以降における「商業の復活」(la renaissance du commerce) を重視する所論⁽²⁾への伏線をなしていることはいうまでもない。

ドーブシュとピレンヌの比較については、すでに別の

機會にやゝ詳しく紹介したことがあるから、こゝではくりかえさぬこととするが、論證の方法があくまで實證的である限りにおいては、兩者ともまったく優劣をつけ難いほどの精緻さをしめしている。記述家達の手になる若干の史書・傳記・年代記や勅令のたぐいを根據となし、庶民史料のきわめて稀少なフランク時代の經濟情況をどう判斷するかという段になると、個々の斷片史料が物語る意味の位置づけは、方法が實證的であるかどうかということよりも、むしろその深奥で意識的・無意識的に作用すると思われる各史家の歴史のとらえ方、ひいてはその時代への規定の關心、または全體への見透し如何といったことが、意外に大きな見解の相違をもたらすものである。ドープシュとピレンヌの對立も、多分にこうした性格をふくんでいるように思われてならない。

その事情をいますこしく立入って考えてみるならば、要するにフランク王國における經濟情況の位置づけの問題は、大部分の歴史家達によって、古代と中世との時代分けの問題に關連して、特殊の興味をいだかれていることに氣づくであろう。つまりフランク時代そのものの分析

は、西ヨーロッパ中世の經濟的基礎をどこに置くかというより、大きなテーマにつながるものと考えられる傾きがつよい。その場合、ドープシュ及びドープシュ學派のいわゆる文化連續説のごとき立場よりするならば、民族大移動よりフランク時代全體を通じての多様且つ一種樂天的な經濟發展の描寫が、ひたむきに前景におしいだされるのに反し、ピレンヌのごとく、一方でローマ的なものの存續を確信し、他方でそれとまったく異った中世社會の出現を強調するものにとつては、どうしても兩者のきりかえの契機が問題となるわけで、それをピレンヌは「アラビア人の侵入」(Arabgefahr) という外側からのショックによると考え、カール大帝の諸業績、特に封建的支配の確立は、實は商業交易の最も沈滞不振なカロリング王朝初期の土壤の上にうちたてられたものであるとみたわけである。

そこでいま假りに、古代から中世への轉換の問題に關し、この二人の碩學の立場を兩極に置いて考えた場合、吾々としては第一に、そのいずれの構想により、多くの贊意をいだいて史料にのぞむかということと、第二には、

兩極の中間に存在すると思われる無數の立場のいずれかを積極的に立證しうるのではなからうかという一應別個の二つの考え方を豫想することが出来る。しかしこの二つは、實際には、つねに必ずしも無縁なわけはなれた考え方ではない。たとえば、如何に文化連續説を固執するドーブシュといえども、幾世紀の長きにわたる過渡期中では、社會發展のいわゆる新形成 (Neugestaltung) の契機なりモティーフなりを、決して無視したり輕視したりすることは出来なかつたのである。逆(四)にまた、回教徒の侵入を重視するビレンヌの學説も、もっぱら流通經濟面の變容に焦點をあわせながら、その面だけについて(五)も、北イタリアとライン河口地帯という二つの例外的な商業の繁榮を、カロリング王朝期について認めているほどである。従(五)って個々の事象を内容的にたどってゆくならば、一見兩極端のごとくにみえる二人の所論は、案外接近したものとして理解出来る一面をもそなえている。さきに私が實證の面よりも、構想の相違が大きく反映しているといったのは、この意味からもうなずかれるであらう。

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

それでは一體この二つの學説は、どう批判、反駁または修正されればよいのであろうか。両者が中世經濟史の全體に對していなく構想を、その全著作を味讀することによって吟味比較し、こうした對照的な見解のうまれる所以を解明することは、吾々にとつてもさほど困難な仕事ではない。しかしいま吾々に問題なのは、そのような史觀への批判ではなく、兩説をば一方に豫想しながら、他方ではフランク王國の經濟情況という嚴然たる史實を、どうすれば可能なかぎり客觀的に位置づけうるか、その位置づけによって、ふたゝび逆に兩説をどう内容的に批判または修正出来るかという點である。

このような要請から考察のいとぐちをみつつけようとする時、さしあたり問題となるのは、ドーブシュの連續的發展觀よりも、むしろビレンヌの一連の考え方、即ちメロヴィング王朝時代の古代的・地中海的な國際交易社會、イスラム侵入による地中海交易の斷絶、カロリング王朝時代の中世的・土地中心的な實物經濟社會への釘づけ、封建社會の成立というあのあざやかな着想であらう。事實、ドーブシュ説への批判は、民族移動期のとらえ方

に集中されているのに反し、ビレンヌ説へのそれは、ほとんど兩王朝の經濟的對照觀に向けられてゐるのであるから、吾々のテーマについても、やはりビレンヌを中心吟味することの方が、より適切であると思う。

それではビレンヌの所説への批判は、いまままでのような觀點からなされており、また批判の裏づけとなる反證の方法は、如何なる性格をそなえてゐるであろうか。さらにはそれら諸家の批判と反駁は、はたして何らかのきめ手となるような根據を具備してゐるであろうか。最近における歴史學の新しい考え方を考慮しつつ、この事情のあらましをたどってみよう。

附註

- (一) 代表的には A. Dopisch: Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung. Bd. 2, 2. Aufl. Wien 1924, Kap. 6 u. 7; H. Pirenne: Mahomet et Charlemagne. Paris et Bruxelles 1937. を見よ。
- (二) 特々 H. Pirenne: Histoire économique de l'occident médiéval. Bruges 1951, p. 170—191. 参照。
- (三) 拙稿『フランク王国の商業交易』(『獨逸中世史の研究』所収)

(四) A. Dopisch: Grundlagen, Bd. 2, Kap. 2.

(五) H. Pirenne: Mahomet et Charlemagne. Par. II. Cap. 3.

(六) 兩者の學風と業績の概要については、拙稿『アルフオンス・ドープシユ』(『社會經濟史學』一六卷二號所収)及び『アンリ・ビレンヌの業績について』(『一橋論叢』三〇卷五號所収)を參看されたい。

二

さて上に略述したビレンヌの着想は、基本的意味においてはすでに一九二二年のアメリカ講演旅行の前後に出來ており、それについての短い論文を公表してゐるのであるが、それがゆたかに肉づけされて、藝術品のごときユニークな敘述にまとめあげられたのは、いふまでもなく彼の歿後一九三七年に刊行された名著『マホメットとシャルルマーニュ』においてであつた。それゆえ古代の終末、フランク王国の性格等についてのビレンヌ説への批判と反駁は、遺著公刊の以前からあらわれてゐる。それらをもふくめて、今日にいたるまでの文獻で、直接・間接にビレンヌ説を考慮した一般諸家の著書・論文をか

ぞえあげるならば、おそらく豫想もつかぬ多数にのぼるであろう。遺著が直ちに英譯せられ、また獨譯せられたことに徴しても、この事情が推測されうる。しかしそうした雑多な反響はとにかく、本格的にビレンヌの考え方を評した歴史家達は、はたして如何なる態度と主張をしめしているであろうか。

片々たる論文紹介のたぐいはしばらく措き、もっとも詳細に且つはやくこの學說に反駁の矢をはなつたのは、おそらくドーブシュ門下のエルナ・パツツェルト女史の著作『フランク文化とイスラム』(一九三二年刊)であろう。^(八)その師ドーブシュの流れをくみつつ、ビレンヌの「地中海的統一」觀に疑念をさしはさみ、その複雑さと異質性を強調した女史は、特に北方ゲルマン諸族からの絶えざる影響、それを介してのオリエントとの交易を説き、最後に回教徒の同化性、従ってまたイスラム侵入後におけるフランクとの交渉の存続を主張する。それによつて、なるほどフランク王國の地位を考える際に吾々が配慮すべき諸民族文化の多様なエレメントだけはしめされたわけであるが、もともと回教國史の専門家でないバ

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

ツツェルトの所論には、讀者をうなずかせる迫力なく、端的にいえば、ドーブシュを越える積極的な主張や、ビレンヌにとゞめをさす決定的なきめ手は、何一つ説かれていない。それはたゞ今後の特殊研究に俟つべき諸問題の所在だけが、やゝ明瞭に指摘されたにとゞまるのである。^(九)

これに反し、E. Sabbe や R. S. Lopez の批判は、特定の史實についてのするどい反駁として注目されるべきものであるが、しかもなおビレンヌの構想を根柢からくつがえすほど斬新な主張ではない。^(一〇)爾餘の批評、殊に『マホメットとシャルマーニユ』の公刊直後に出た各國史家の書評の大部分は、いづれもこの碩學の業績に敬意を表してその梗概を簡單に紹介するか、さもなければ、多少とも批判的な言葉によつて疑問を後日の専門研究にゆだねるといった態度をとっているだけである。^(一一)このことは、一言にしていうならば、從來の西ヨーロッパ中心の歴史研究の立場からする限り、ビレンヌの所論に對して内容的に眞正面から取組むということは到底不可能にちかいかのではないかということを暗示している。いいか

えれば、ローマ末期とメロヴィング王朝時代との關係、メロヴィング王朝とカロリング王朝との關係といった歴史の縦の關係のみを重視して批判することは、當時の史料の性質上きわめて困難であり、個々の斷片史料の物語る内容を、特殊なものともみるか、一般的な現象ともみるかによって、いかようにも時代の解釋が可能であるといえるのである。ドープシュのあの詳細な研究を熟讀してさえ、なお且つ吾々にはこのような一抹の不安がつよく印象づけられる。それでは一體どうすればよいのであるうか。この難問に解答をあたえようと企てた一つの好例は、一九四八年に發表されたダニエル・デンネットのやや詳しい論文である。

ダニエル・デンネットは、ハーヴァード大學の出て、近東の諸語と歴史に通じ、バイルートのアメリカ文化關係アッタシエとして活躍、一九四七年三月、エチオピアにおいて三十七歳を最期に不運にも殺害された惜しむべき青年學徒である。そのため彼の觀點は、從來のごとき粹にはまった西ヨーロッパ中心のものではなく、むしろイスラム側の文獻・史料に照しての考察であり、いわば

横のひろがりの中に西ヨーロッパ社會というものを置いて批判しようとの立場に立っている。それに加えて彼には、若干の經濟理論が推論の手段にもちいられている。

即ちデンネットの論文は、まずビレンヌ説への六つの疑問の提出というかたちをとり、その各々に、イスラム側からみた反證をあげることによって、結局は全面的な駁論におわるものである。その第一の疑問は、地中海の商業交易を禁止することが、はたしてアラブ側の政策或いは實踐であつたらうか、もしそのような傾向がみられたとしても、その時期を吾々が確定しうるであらうかという點である。これに對しては、イスラム側の寛容性を説き、むしろガリアのキリスト教徒の方が交渉禁止の意圖をもっていたと述べ、さらにアラブによる實際上の地中海制覇は、わずかに七七四年から七八〇年までの數年間に過ぎず、他はいずれも局地的且つ一時的なものであつたに過ぎないと斷定する。

第二の疑問は、ガザの酒、エジプトのパピルス、オリエントの香料等が、カロリング王朝期に入って西ヨーロッパ社會から消滅したとみるビレンヌ説への反駁であ

る。これに對しては、ピレンヌが考えたよりも遙かに後世までそれらが使用されていたことを例證し、パピルスの如きは、教皇廳では十一世紀にいたるもなお使用される風があったと説く。

第三の疑問は、カロリング王朝時代の初めから、ガリアでは目にみえるほどはつきりと外國貿易が衰退したというのは眞實であらうかという點である。これについてデンネットのあげるところは、ガリア北部とスカンジナビア諸地方との交渉、ひいては北方を介してのオリエントとの通商の事實であり、すでにドーブシュエやパツェルトによって指摘されたところ以上には出ていない。

第四には、メロヴィング王朝期のガリアの文化を、國際貿易で彩られたものとみることに疑問であり、國內政情の混亂による經濟的不振、局地的小市場の存在等の事實をみのがしてはならないと主張する。これには特にドーブシュエの研究が考慮されるべきであらう。

第五には、ピレンヌのいわゆる「ローマニア」なる觀念への疑問である。つまりローマ世界というものを、思想・法律・言語・外交・共通の利害といったあらゆる方

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

面の眞のユニティとして想定することは不可能であり、また帝政華やかな時代の様相を、そのまゝメロヴィング王朝末期まで妥當すると説くときは、歴史的變遷の實態を誤解した謬見であると強調する。これまたあきらかにドーブシュエ學派の所説をとりいれた當然の見解であらう。

最後に第六の疑問は、金貨から銀貨への移行の眞の原因と意味とは如何に解すべきであるかという點である。この點についてのデンネットの所論は、かなり多くの推論をふくんでいる。即ちピレンヌの説くように、カロリング王朝に入つて、貿易の不振が金の稀少・缺如をまねき、銀本位に移行せざるを得なかつたという見解は、デンネットによれば逆に考えられている。輸出入のバランスという前提から出發するならば、金がガリアから消滅したのは、輸入品が多いためにオリエントへ金が流出したか、さもなければ退藏されたかでないならぬ。ピレンヌのように、東方からの各種輸入品の消滅のみの史料をあつめて、金貨缺如の根據となすことは、理論にあわないという。そこからしてデンネットは、メロヴィ

ング王朝時代のガリアの金貨が、内亂のためにおそろしく悪質且つ雑多な、信用の置けぬものとなっていたことを指摘し、もともと金産量がすくなかった西ヨーロッパでは、すでにメロヴィング王朝期以來、金・銀・銅等多様な貨幣が流通していたことを例證する。そして結局金貨の減少は、一方的な貿易の結果、長いあいだに漸次にオリエント方面へ流出したか、グレシャムの法則のごとく、外國商人が、地方的な小取引のために悪貨だけをのこし、良貨をたくわえるか、もち出したかのいずれかに起因するのであるかと推定する^(一四)。しかしそのゆえにこそ、カロリング王朝期にも金貨や金が豊富であったと説くドーブシュのいわゆる「並存説」または複本位説は認め難く、またビレンヌのように、金貨から銀貨への移行の結果、「實物經濟」へ後退したと簡単に割切ること^(一五)は、なおさら無意味な主張であると結論する。蓋し銀本位または銀に重點を置く經濟は、單にそのことのゆえに“anti-commercial”な實物經濟とは斷じ難いからである。封建制度は實物經濟に適合的な制度であるなどという考えは、たとえそれが眞實であるにしても、その實物

經濟ということの意義を、貨幣制度の内面的理解とともに慎重に判断されなければならない。

デンネットの駁論は、大様上述のごとくであるが、これによって吾々は、何か客觀的なきめ手を納得のいくかたちであたえられたといいうるのであるか。すくなくとも私には、殘念ながら否定的たらざるを得ない。たゞデンネットのすぐれた點は、西ヨーロッパ史の中からではなしに、いわばその外側の政治・經濟史の知識からして、あのあまりにも割切ったビレンヌの構想に警告を發したという點であり、いま一つは、通商のバランスという前提から、多少理論的に經濟社會の變容を推論した新着眼であるといえる。

最近西ヨーロッパ社會の在り方を、從來のごとく縦の關係からばかりではなしに、その時々々の横のひろがりとの關係において、より客觀的に把握しようとの傾向が、歴史研究の各方面にあらわれている。或る社會はそれに先行する傳統なり制度なりの變化または發展であると同時に、同時代の周圍のうごきに絶えず影響せられて存在を規定される。この後者の考え方が最近とみに注目され

て来た。オリエントのステップ民族との關係で封建的な兵制の起源をとりあげ、ビザンツとの關係で中世帝權の在り方を論ずるとき、その好例である。チンネットは、その意味において、たしかにいままでに見られなかった一つの新しいものの方を、吾々に提示してくれたといえる。しかしその見方をもつてしても、なお決定的な反駁と積極的な立論をなしとげるまでにはいたらなかった。

このような情況にある時、それに類似した立場から、より徹底的に、そしてより客觀的に、ビュンヌとドローシユの對立についての批判と修正をなすとげ、カロリング王朝時代の國際的經濟環境を見定める上に重要な貢獻をなしたのが、スエーデンの史家ボーリンの新研究である。

(十) Mahomet et Charlemagne. (Revue Belge de Philol. et d'Hist. Tom. I, 1922); Un contraste économique Mérovingiens et Carolingiens. (Revue Belge, Tom. II, 1923) 等々。

(十一) E. Patzelt: Die fränkische Kultur und der Islam. Wien 1932.

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

(九) 詳しくは前掲拙稿『フランク王國の商業交易』第三節を參看された。

(一〇) E. Sabbe: L'importation des tissus orientaux en Europe occidentale au Haut Moyen Age, IX^e et X^e siècles. (Revue Belge de Philol. et d'Hist. Tom. XIV, 1935, p. 811—848); R. S. Lopez: Mohammed and Charlemagne. (Speculum, Vol. 18, 1943, p. 14—38) 參照。

(一一) 例としてこの諸家の書誌參照。R. Latouche (Le Moyen Age, X, 1939); P. Rolland (Revue Belge de Philol. et d'Hist., XVIIII, 1939); H. Zeiss (HZ, Bd. 158, 1938); J. Romein (Tidschrift voor Geschiednis, Bd. 53, 1938); E. Joranson (Amer. H. R. Vol. 44, 1939); L. Halphen (Revue Historique, vol. 185, 1939); A. Colville (Journal des Savants, 1938); H. Laurent (Byzantion, VII, 1932) 等々。

(一二) D. C. Dennett: Pirenne and Huhannad. (Speculum, Vol. 23, 1948, p. 165—190)

(一三) D. C. Dennett: *ibid.*, p. 167—8. 參照。

(一四) D. C. Dennett: *ibid.*, p. 188 f.

(一五) A. Dopoch: Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft in der Weltgeschichte. Wien 1930. S. 116 f. 參照。

一 橋論叢 第三十二卷 第四號

- (一六) H. Pirenne: *Malomet et Charlemagne*. Par. II. cap. 3. の所論を見よ。
- (一七) 一例をこゝにせよ。G. Vernadsky: *Der sarmatische Hintergrund der germanischen Völkerwanderung*. (Saeculum, Bd. 2, 1951, S. 340—392). なお拙稿『騎兵制と封建制起源の問題』、『社會經濟史學』一九卷四・五號所收)を参考されたい。
- (一八) 例えば W. Ohnsorge: *Das Zweikaiserproblem im früheren Mittelalter*. Hildesheim 1947. のことを思え。

三

ポールの好論文『マホメット、シャルルマーニュ及びブルリック』は、ドープシュ對ビレンヌの論争にことよせ、もっぱら貨幣史を中心に、カロリング王朝時代の經濟的變容を、可能な限り客觀的につきとめようとした劃期的な企てである。即ちポールは、上述したとき見解の對立が何らかのきめ手をもち得ないわけは、初期中世の史料が統計的比較の基礎となる性格をもちあわさぬこと、従って斷片史料の意味する史實は、論者の構想から來る要請の如何によって、いかようにも解釋可能であ

ることと基因するものと考え。

そこでまず論争とは別個に一般に認められている二つの事實、即ち(一)カロリング王朝期には、西ヨーロッパと回教圏との交易はとにかく衰微したが、回教圏自體の内部では都市及び商工業の繁榮がもたらされたこと、(二)西ヨーロッパと北歐諸地域との交渉は、その内面的意義が何であろうと、特にカロリング王朝後期にさかんとしたこと、この二つの基本的事實の再吟味から出發する。そしてこの二つの事實から、フランクと北歐との交渉が、東西交易の衰退並びに回教圏と北歐との通商の興隆と如何なる内面的關連があるのかをさぐるようになるのである。そしてそのためにえらばれた方法が、出土鑄貨の分布・重量・純分の變化を比較研究するというまことに斬新な、そしてうごかすことの出來ぬ客觀的な方法なのである。ヨーロッパ各地は勿論のこと、ひろく回教圏から出土した鑄貨の、博物館所藏カタログ並びにヌミスマティークの諸業績が慎重に考慮せられ、集計せられ、その變化が綜括されることとなる。

このような方法で調べた場合、まずメロヴィング王朝

期では、その前期には地中海周縁諸地方と共通の金貨が壓倒的であるが、七〇〇年以降になるとかなりの銀貨があらわれ、八世紀中頃からは銀貨が壓倒的に多くなつて来る。つまり一時的な貨幣改革で銀本位制が採用されたというごときものではなしに、かなりの年月を経て、金貨から銀貨の流通へと漸次移行していることがわかる。

つぎに同じ頃の回教圏の事情をみるに、初期にはビザンツの影響下に金貨が優勢であり、たゞイランの地方だけは根強く銀貨の優越がのこっていた。ところが七〇〇年頃をとってみると、全般的には金銀複本位制の状態が認められる。また同じ回教圏であるところから、七二五年以後のスペインでは銀貨が漸次壓倒的となり、アフリカも大體同じ傾向をしめして来る。つまりフランク王國も回教圏——こゝでは主としてスペイン、アフリカ——も、ほとんど同じ時代から銀貨を重視する體制にきりかえられて行く現象が明白に看取されるのである。

さらに貨幣のタイプについて比較してみると、これまで回教圏のディレム(drehem)貨——ヘルシア、さらにさかのばればギリシアのドラクマ(drachma)に發する

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

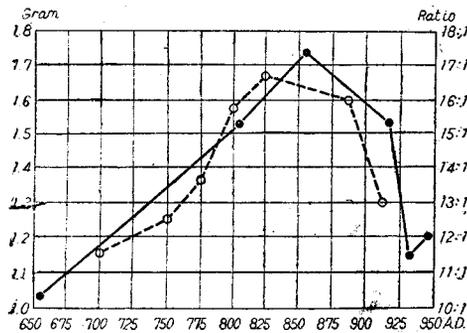
貨幣——が、フランクの銀貨たるデナリウス(denarius)のモデルとなつたことがあきらかである。即ちメロヴィング王朝時代のように、皇帝や支配者の肖像の刻印に代つて、大文字の刻印が漸次に一般化されてゆく。この變化はまた、八世紀中葉以降のビザンツの銀貨についても認められる。これらはいずれも六九六年、回教圏の通貨改革によつて宗教的字母を象徴する文字の刻印がもちいられたことに起因するのであり、ビザンツにおいても直ちにキリスト教的な文字、例えば“Jesus Christus Rex Regnantium”の頭文字の刻印があらわれた。それから約一世紀おくれ、カール大帝やルドヴィッヒ虔王は、やはり宗教的な句、例えば“Christiana Religio”のとき句のイニシアルを採用した。それのみではない。八世紀末葉からは、フランク王國でも、回教圏の影響下に、鑄貨にはそれを鑄造した場所または銀鑛の地名が、略稱をもつて刻まれることゝなつた。例えば、“Metall(um) German(um)”, “Ex Met(allo) Nov(o)” の⁽¹¹⁾と⁽¹²⁾きその一例である。このような密接な相關關係または一方から他方への影響は、一體何を物語るものであろうか。

問題はメロヴィンガーとカロリングアとを分けることではなく、こうした相互関連の變化を分析することである。従来の研究では、貨幣の形態や刻印、重量等は、それにさきだつ前時代との關係で考察されるのが一般であった。さもなければ或る特定の爲政者の幣制改革によるものと説明されるのが普通であった。勿論そのような場合もあつたであらう。しかしこゝに吾々に重要なことは、たとえ改革の事實があつたとしても、その改革を必要ならしめた要因が何かという點である。ポーリンの研究は、これを飽くまでも回教世界との關連において説明しようとするものである。

かくてポーリンは、フランクの銀貨(デナリウス)と、回教圏の銀貨(ディレム)との内容分析にはいる。まずデナリウス貨については、その重量の變動をあとづけ、ディレム貨については、回教世界における複本位制のゆえに、金銀比價が九四一年、一對一二に固定されるにいたるまでの兩者の比率の變動を詳述する。この點に關するポーリンの史料のあげ方並びに分析の方法はきわめて獨創的であり、讀者をして納得せしめる充分の客觀性を

ふくんでいる。その詳細についてこゝに觸れるいとまはないが、ポーリンが到達した兩者の關係をうかがうグラフをしめせばつきのごとくである。

複本位制ならば、回教圏にみられるように、銀の價格の低落は(一)金貨の質または重量を減ずること、(二)銀貨の重量を増大すること、(三)兩貨相互の比率を變更すること等の三方法を適宜に採用することが可能である



回教世界における金銀比價の變動
フランク王國デナリウス貨の重量の變動
〔S. Bolin: Mohammed, Charlemagne
and Ruric. p. 16. による〕

(三) ほとんど銀本位にも似たカロリング王朝時代においては、銀貨の購買力を維持するためには、どうしてもデナリウスの重量を増すという結果にならざるを得なかった。このことはすでにカロリング朝の初期にあらわれており、ビビンの時、銀一リブラ即ち三二七グラムから二二ソリドゥス即ち二六四デナリウスを鑄たのに對し、カール大帝の時には、同じ三二七グラムから二〇ソリドゥス即ち二四〇デナリウスを鑄る規定となつたことからも推測出来る。(三) としてルードヴィッヒ度王の治世には、漸増してついに一デナリウスが一・六七グラムの重さに達したのである。つまり一國の貨幣というものは、その國の事情だけで變動するものではなく、つねにその周圍の指導的な經濟圏の影響下に變動するものであることが、前掲のグラフによって理解出来るのである。

即ち銀が回教圏でその價值を低下しつゝあつた時、即ち九世紀の中葉までは、フランクもその經濟環境に影響されて、デナリウス貨の重量を漸増した。ところが九世紀の中葉以降、銀の金に對する價值が増大して來ると、單本位のフランクも直ちにその影響をうけて、デナリウ

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

ス貨の重量が漸次減少するという傾向をしめしている。このことは、重さこそ變動したけれども、フランクのデナリウス貨というものは、つねにコンスタントに一つの基準、即ち回教圏の金に對應していたことを雄辯に語っている。ローマ末期との關係のみで、フランクの貨幣制度を論ずることが如何に片手落ちであるかは、この一事に照しても明らかであろう。吾々はこのような現象が、歴史の如何なる時期にも存在したのではないかという感じを深うせざるを得ない。

それではつぎに、何が原因となつて金銀比價が九世紀中葉を境として變動したのであるうか。ポーリンはこのことを究明するために、當時における金銀の産出狀況、とりわけ回教圏の事情を詳細に考證する。即ちフランク王國領内における鑛山の開發は、當時における世界の銀の價格に變動をあたえるほどの産量ではなかつたと述べ、問題の所在はもっぱら回教圏側にありと推定し、アラブ勢力の東漸、とりわけクラサン、トランスオクサニアの領有にともなう諸銀鑛、わけてもバンジヤヒル及びシャッシュ銀山のおどろくべき開發に着目する。史料はほ

とんどアラビア地理學者の記述であるが、例え九世紀後半シヤッシュ銀鑛の年産額が三〇トンであったということは、一五〇〇年頃における世界産銀全量の三分の二に該當するものであり、回教世界の全領域から出た銀の分量が、ものすごく大量であったであろうことを推定せしめるに充分である。^(二五)

回教世界におけるこのようなシルヴァー・ラッシュの趨勢は九世紀中葉までつゞくが、九世紀中葉を境として、グラフにみるごとく、金に對する銀の價値が上昇するのは、何に由來するのであろうか。ポーリンはそれにつき、一つには九世紀中葉にいつてトランスオクサニアの不安な政治情勢が、シヤッシュとバグダットとの關連を斷絶し、銀の流入を遮斷したこと、二つには同じ頃、アフリカ東北隅の、古來より有名な金鑛が征服せられ、新しい方法でめざましい發掘が開始せられたことを挙げ、この變動の根本的な背景であることを立證する。^(二六)

かくしてフランク王國の經濟は、ポーリンに従えば、結論的には八世紀前半の回教徒の侵入を轉機としてゝはなしに、八三〇―八五〇年頃のアラブ側の通貨關係の變

動によつて、金貨に重點を置く經濟から銀貨に重點を置く經濟へ、否、より適切には七〇〇年頃以來、ひきつゞき回教世界の通貨にデイペンドする經濟になつていたこととなる。たゞ同じ銀本位の中にあつて、フランクでは八三〇―八五〇年頃を轉機に、後述するごとく經濟體制の變動がなされたと考ふるわけである。

以上は貨幣史の面のみからみた一つの客觀的な變動または相關關係であるが、それではこのような變動の裏づけとなつていた東西兩世界の商業交易關係はどうであつたらうか。

まず回教圏からフランクに流れ込んだ商品としては銀が豫想せられ、またハイドのあの有名な古典的研究によつて、香料をはじめとするオリエントの奢侈品があつたことがわかる。しかしそれらに對する見返り物資として、ユダヤ商人その他により、何がどの徑路から回教圏へ輸出されたのであろうか。^(二七) フランクからの見返り物資については、従來は西ヨーロッパのエビソーディッシュな斷片史料によつて、まず毛織物が第一に挙げられていたのであるが、それは必ずしも正しい見解ではない。何

となれば、アラブ側の史料によると、むしろ宦官、奴隸、毛皮類等が主要商品であったことがわかるからである。従ってもしアラブ側史料を重視するとなれば、それらはいずれもフランク王國の特産物ではなしに、主としてスラヴ諸地方及びバルト海沿岸産のものであり、それがフランク王國を通過して、スペイン回教圏に出で、アフリカを通過してバクダットに流れていたことが注目されなければならぬのである。ザックセン地方がフランク王國に合併せられ、キリスト教が普及するのに應じて、益々エルベ以東のスラヴ人が奴隸としてその重要性を増して來た。

ところがほど八五〇年頃を明瞭な境界線として、バルト海沿岸諸地方の貨幣の出土状況は、フランク貨からアラブ貨にきりかえられていることがわかる。そのことは實は八三〇年乃至八五〇年頃から、ヴィキングの活躍がいよいよ積極化することゝ相應するのである。そして八六二年と考えられるルリツクによるノルマンのスラヴ族征服並びにその建國をきっかけに、回教世界に對する宦官、奴隸、毛皮類の輸出は、益々多量且つ直接的な取

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

引に變ずるのである。(三二) いわゆるルス(Rus)の商人達が、一方では支配階層として、他方では遠隔地商人として、如何なる生活様式をいとなんだかは一層詳細な分析を要するが、とにかくノルマンの東進により、従来の輸出商品の原産地が、フランク王國を媒介とすることなしに、従ってまたイベリア半島を仲介点とすることなしに、回教圏にそのまま直結するにいたったことは想像に難くない。(三三) つまり南ガリアとスペインの國際商業に占める地位が、舞臺の背後においやられたわけである。そしてあたかもこのことが、九世紀中葉を一大轉期として、フランク王國の經濟環境を一變せしめた最大の事情であつた。(三四) 北方で仕入れ、西南方に輸出していたフランク王國の仲介者的地位は、こゝにいたってまったくNordic-Arab Tradeにその主導權をうばわれることとなつた。ヴィキングの絶え間なき侵入掠奪になやまされる九世紀後半のフランク經濟社會の様相は、まさにこうした體制の激變を物語るものである。

従って吾々は、八三〇乃至八五〇年頃を轉換期として、回教徒がとにかくも地中海貿易の指導的な主人となつた

丁度同じ時代に、ヴィキングが北方から西と東に大活躍を開始し、北歐、西ヨーロッパの大部分に略奪と通商の主導権を確立したことを知る。アラブの貨幣がこの轉期以降、西ヨーロッパ以上に、バルト海沿岸諸地方に多量に出土するのも、このことを立證している。マホメット、シャルマーニェ、ルリックという三人のすぐれた歴史的人物が、經濟史を介してどのように結びつけられているかは、以上の分析によってほゞうなすかれるであらう。

ヴィキングの性格を詳論することは本稿直接の目的ではないからこゝに觸れることは省略するが、とにかく以上がボーリンの異色ある研究のあらましである。それではこの研究によって吾々が感じとることの出来るカロリング王朝期の經濟體制は、どうまとめあげればよいのであろうか。結論にかえて、吾々自身の所感の一端をのべて置きたゞ。

- (一九) S. Bolin: Mohammed, Charlemagne and Runic.
(The Scandinavian Economic History Review, Vol. 1,
No. 1, 1953, p. 5—39) の論文は、すべし一九三九年

「Scandia, Tidskrift för historisk forskning」誌上にてスウェーデン語で發表されたものに訂正を加えて英譯されたものである。

- (二〇) S. Bolin: *ibid.*, p. 12.
(二一) S. Bolin: *ibid.*, p. 13 f. 參照。
(二二) S. Bolin: *ibid.*, p. 17. 參照。
(二三) A. Luschin von Ebengreuth: Allgemeine Münzkunde und Geldgeschichte. 2. Aufl. München 1926, S. 161, 貨幣一覽表に於て Ilgen, Gritzner u. Friedensburg: Sphragistik, Heraldik, Deutsche Münzgeschichte. Leipzig u. Berlin 1912, S. 111 f.; F. Friedensburg: Münzkunde und Geldgeschichte der Einzelstaaten. München u. Berlin 1926, S. 12 f. 等を參照せられたる。
(二四) 例へば Yākfīt の地理事典「Abd Allah ibn Ahmad の断片的記錄」al-Makrīzī の歴史書のついでに於ける。
(二五) イラン地方の當時の情勢については、最近畫期的な著作が公刊された。B. Spuler: Iran in früh-islamischer Zeit. (633—1055). Wiesbaden 1952. 等を參照せられたる。
(二六) S. Bolin: *ibid.*, p. 22 f.
(二七) W. Heyd: Geschichte des Levanthandels im Mittelalter. Bd. I, Stuttgart 1879, S. 104 ff. 參照。
(二八) なる特殊研究として J. W. Thompson: The

commerce of France in the 9. Century. Journal of political economy. Vol. 23, 1915. を参考せよ。

(二六) 井ノ口伊弉册有各名 Ibn Khurādādhīn の記述に於ては、

(三〇) のことと關しては、ノルマン・ロベール等の最後の著作、Magdeburgs Entstehung und die ältere Handelsgeschichte. Berlin 1952. を参考せよ。

(三一) の著作は、G. Vernadsky: Ancient Russia (A History of Russia, Vol. I), New Haven 1943, p. 333 ff. に詳し。

(三二) ノルマンの東進とそこで行われた政治情勢の分析は、その書物にはあるが、J. Margant: Osteuropäische und ostasiatische Streifzüge. (ca. 840—940), Leipzig 1903. が權威がある。特にその S. 18 ff. をみよ。

(三三) このことと關しては、最近の好論文として、考古學の面から考證した H. Jankuhn: Der fränkisch-friesische Handel zur Ostsee im frühen Mittelalter. VSWG. Bd. 40, 1953, S. 193—243. を挙げられる。特に S. 229 ff. を参考せよ。

(三四) その情況は、フョーゲルの古典的名著、Die Normannen und das fränkische Reich bis zur Gründung der Normandie (799—911). Heidelberg 1906. に詳しく述べられてゐる。なお拙稿『九世紀に於けるフランク王国

カロリング王朝期フランク王国の經濟環境

業』(拙著『ヨーロッパ社會の誕生』所收)をも参考されたい。

四

以上吾々は、フランク王国特にカロリング王朝時代の商業交易の在り方をどうみるかについて、あまりに多くの學説を紹介し過ぎたかも知れない。しかしこの問題を正しく見定めるためには、單に西ヨーロッパ側の斷片史料を蒐集することだけでは、どうにも解釋が不可能なのであつて、敘上のごとき諸學説のたどつた途を、一應一通りはわきまえてかゝらねばならないのである。このようにして吾々は、ようやくポールの新研究にいたり、一種のきめ手と考えられる手がかりを得たわけである。ではポールの主張と、従来の諸學説並びに同じテーマに關する多くの特殊研究や概説書との間を、^(三五)どのよう

に綜括すればよいのであろうか。フランク王国内部の各時代における經濟發展の諸相を考察することは別の機會にゆずり、ここでは上述したところのみから、この時代の變化について、私なりの見透しを綜括して置きたいと思

う。

まず第一に、八三〇年乃至八五〇年の頃を轉期として、フランクの經濟體制がすくなくとも對外的に急變した事實は、ポーリンの主張通り、吾々も一應認めなければならぬであらう。そのように解することによって、ドーブシュがカロリング王朝における國際貿易の發達を主張するために採用するピピン、カール大帝、ルードヴィッヒと虔王等の史料の意味が、矛盾なく理解され得る。しかし九世紀中葉以降の情勢に關し、これを單に前時代よりの繼續的な發展であつたとみることには、大きな疑問がある。北歐諸地方との交渉の有無のみをみれば、或いは一見そのような斷定も可能であるが、しかしその意味は、前時代のそれとはまったく異つたものであることが、ポーリンによつて説明せられた。吾々はこの事實、即ち同じカロリング王朝の中で、その前後の二期が、國際貿易の方向づけにおいて、およそ別個のものであつたことを、あらためて再確認しなければならぬ。^(三六)

第二に、それではこのようなカロリング王朝時代の轉換をもつて、古代的なものが眞に中世的なものになつた

決定的な時期であるとみなし得るであらうか。もしピリンヌの考え方を敷衍するならば、或いはこうした見方も可能であらう。しかしポーリンは、どこでもそのような轉換期として、九世紀中葉の變化を主張しているのではない。吾々も亦、ポーリンとともに、九世紀中葉もつて古代より中世への轉換であるとする説には、容易に贊同することが出来ない。何となればそれはなるほど國際貿易の方向轉換であつたには相違ないが、しかしすでにそれ以前から、諸多の生活領域や政治・法制の面で、古代的な體制がくずれ去つていたと考へざるを得ないからである。つまり長い過渡的な推移の中で、何をもつて最も本質的な變化と考へるかによつて、古代より中世への轉換の問題が論議さるべきであり、單に商業交易の方向の變革のみをメルクマールとすることには、なお多くの疑義が存するからである。^(三七)

第三に、もしポーリンの説を正しいとして、九世紀中葉の轉換の原因を何にもとめればよいのかという問題である。即ちこの時代における貨幣價値の變動と、交易方向の變化との内的な關連は、決して經濟理論的な因果關

係によって媒介されているのではなく、むしろその當時の政治情勢をバックとして、経済的な變化がおこっていると推定せざるを得ない。換言すれば、回教圏における銀の價格の上昇ということも、ヴィキングによる東方との直結ということも、ともに何よりも政治的な變化の結果であり、また両者がほとんど同じ時代におこったのは、たまたま歴史の出あいに過ぎないのであって、原理的にそうなるべくしてなったのではない。この點に私は、ポーリンの経済史的な研究にも、やはり一つの限界があるように思われてならない。

第四に、第三の推測が許されるならば、カロリング王朝末期の政情というものが、この時代の經濟情況を判断する上での、この上なく重要なファクターとなつて來る。即ちヴィキング侵入のさなかにおけるフランク社會の實情は、すでにフォーゲルが描出したごとく、どの方面からみても極端にパッシヴな、まことにはじめな情況であつた。^(三六)ほとんどすべての河川の河口地帯はノルマンの駐屯地と化しており、相當奥地にまでも略奪の慘事がくりかえされていた。のみならず東西フランクの分離を

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

みちびく内訌が、地方諸權力の分立というかたちで混亂をまねいていた。^(三七)このような内外多事の政情下において、如何に文書・史料の上に「市場」の名があらわれていようとも、吾々は恒常且つ健全な國際交易が育成または存続していたとは、どうしても考えられない。この點に關し吾々は、特にドーブシュの所論に多くの疑問を感じる次第である。^(四〇)要するにカロリング王朝末期の受動的な變則的交易現象は、たとえその大半が略奪を通じての財貨の移動でなかつたとしても、ノルマン民族とフランク社會という政治史的な分析を俟って、位置づけらるべきものである。

第五に、金貨は大規模な國際貿易の決済に適し、銀貨はローカルな小範圍の市場取引に適應するというピレンヌの前提、並びに金貨の消滅と銀貨の出現とは、貨幣經濟より實物經濟・反商業社會への轉落の證左であるとの考え方に、根本的な疑問をいだかざるを得ない。それと同時にまた、ドーブシュの説くごとく、金銀兩貨の並存 (Ko-existenz) にこだわった主張にも、一脈の不滿をおぼえるものである。蓋しこのような主張は、一見理論的

な要請に發するものごとくであるが、その實何ら理論的な構想を創出するものではない。つまり封建社會というものを、安易に實物經濟の時代と考えたり、「anti-commercial」な社會と考えることは、逆に封建社會にも合理主義や利潤追求が行われたと主張するのと同様、何ら歴史的基盤に即した理論の構成にはならない。吾々はこのことをあらためて深く反省しなければならぬ。吾々に問題なのは、貨幣經濟か實物經濟かということ、または兩者の並存であると主張することではなく、逆にもっと歴史的理論的に、封建社會における貨幣というものが、どのような^(四一)ごき方または在り方をしめすかということへの分析である。つまり資本主義社會における理論ではなしに、封建社會の中から、封建社會に即した貨幣の理論をうちださなければならぬ。このことこそ、最も肝要な點なのである。ボーリンの研究は、この問題に對して、外側からの一つの在り方を吾々に示してくれた。吾々としてはそれをフランク經濟の實際面から、もう一度再吟味することが必要であらう。

第六に、ボーリンの研究方法に對する一つの疑問があ

る。それはいうまでもなく、回教圏の貨幣變動の波をうける他の重要な地域として、フランク以上にビザンツ帝國の貨幣が問題となるが、それがどのような變動をしめしたろうかという點である。しかしこのことは、ボーリンに不満をおしつける筋合いのものではなく、吾々自身^(四二)が同じ方法によってグラフをつくってみるよりほかはない。

最後に第七として擧ぐべきは、ビレンヌの商業復活の二大基地、即ちイタリア北部とライン河口地帯の「例外的」な繁榮は、ボーリンの研究によっても、いよいよその眞義を解明され得たのではないかという點である。^(四三)即ち地中海が回教徒に占められたとはいふものの、アドリア海沿岸にそってのビザンツとの交易は、その地の政情に照しても決して斷絶したわけではなかった。他方ライン河口地帯は、ヴィキング略奪の最も重要な對象となつた反面、九世紀中葉以降は、北歐との交渉の最も重要な基地たる地の利を占めていた。従つてこれまたカロリング王朝後期以來、消極的意味においてとはあつたが、みすてられた南ガリアなどとはうってかわつた興

隆への萌芽を藏していたことが理解される。結論的には、これに關するビレンヌの所説は正しいと考えられるが、その意味はボーリンの研究により、一層はっきりしたのではなからうか。

以上七つの問題は、互いに密接な關連をもっている。その一々について詳しく吟味するいとまはないが、今後吾々がフランク王國の經濟を考察する際には、どうしても考慮されなければならぬ問題點といえるであろう。その意味で本稿は、ドーブシュ對ビレンヌの對立した主張から出發し、學説の變遷を略述しつゝ、本格的な研究に入りゆく一つのつとぐち、または問題點をみつつけようとしたまできである。即ちそれは單に諸學説の紹介や整理をめぐしたるものではなく、あえていえば、私自身の研究の方途を見定めるための、最も納得のいく考え方の一例をしめそうとしたものであることをおことわりして置きたす。

歴史研究において諸多の學説を整理することはたしかに必要である。しかし對立した學説をどう結びつけるかということは、結局は史實の實際を分析してからでなけ

カロリング王朝期フランク王國の經濟環境

ればならない。ところが對立した學説を、きめ手のない不徹底な實證によつて折衷することは出来ても、うごかすことの出来ぬきめ手によつて再吟味するまでにいたることは、容易な業ではない。以上の學説のあとづけによつて、この事情の一端が紹介されたといえるならば、本稿の目的は一應達せられたといつてよい。

(三五) 例えばドーブシュのカロリング王朝期の經濟社會に關する多數の論文をはじめ、P. Kieker: Nordwesteuropas Verkehr, Handel und Gewerbe im frühen Mittelalter. Wien 1924; H. Arhman: Schweden und das karolingische Reich. Studien zu den Handelsverbindungen des 9. Jahrhunderts. Stockholm 1937; H. Bechtel: Wirtschaftsgeschichte Deutschlands. Bd. 1, 2. Aufl. München 1951, S. 147 ff. 等。

(三六) このように考えた場合、私がかつて紹介した上述アルフマンのすぐれた考古學的研究を、どう位置づけるべきかが、あらためてまた問題となる。拙稿『ホルガー・アルフマン著・瑞典とカロリング王國』(拙著『ヨーロッパ社會の誕生』所收)を參看された。

(三七) この大きな問題については、拙稿『古代より中世への轉換の問題』(『經濟研究』第三卷第四號所收)をみられたい。

一 橋論叢 第三十二卷 第四號

(三八) W. Vogel: Die Normannen und das fränkische Reich. Heidelberg 1906. は各所でそれを詳述している。なおこの書にはノルマンに侵された地域のすべれた附圖がいろいろある。

(三九) 拙稿『キリスト國家の成立をめぐる諸問題』(『現代歴史學の新動向』所收) 参照。

(四〇) A. Dopsch: Karolingerzeit, Bd. II, S. 186 ff.

(四一) 封建社會の貨幣と信用の在り方について A. Dieudonné: La théorie de la monnaie à l'époque féodale et royale d'après deux livres nouveaux. Revue Numismatique, 1909; W. Taenber: Geld und Kredit

im Mittelalter. Berlin 1933. 等がすべれたっている。しかしまだ徹底的に考證し、史實から理論的なものをみちびき出した名著は出ていないように思われる。

(四二) シシンの物價史・貨幣史の文獻について N. H. Baynes and H. St. L. B. Moss: Byzantium, an

introduction to East Roman Civilization. Oxford 1948, S. 395 ff. の文獻目錄参照。しかし書々の目的は貨幣の歴史を述べたことである。

(四三) H. Pirenne: Mohomet et Charlemagne. Par. II, cap. 3. の敘説を参照。

(昭和二九・卅・二三)